

聖書：ヨシュア記2章15～24節

説教題：おことばのとおり

1 ラハブがふたりをかくまった理由

(1) したたかな計算？

ヨシュアは、イスラエルの民を率いてヨルダン川を渡り、約束の地カナンに入ろうとします。ヨルダン川を渡ったすぐ先にはエリコという大きな町があります。ここを攻め落とせば、約束の地へ入る大きな足がかりとすることができます。ふたりの斥候がエリコに派遣されました。

ふたりはラハブという遊女の家に向かい、エリコに関する情報を集めます。ところが、すぐにエリコの警察に感づかれ、警察はラハブを尋問し、スパイの居場所を聞き出そうとしました。

ラハブは、このとき大きな選択を迫られます。ふたりのスパイのことを警察に通報するか。それとも、隠し通すのか。スパイを警察に突き出せば、とりあえず自分の身の安全は確保されます。ところが、ラハブはスパイをかくまうことを選びます。なぜあえて危険な選択をしたのでしょうか。

きわめて人間的な見方をするなら、こんなことが言えます。エリコの住民はみな震え上がっていて、これはとても勝ち目はない。このままエリコにとどまるなら、おそらく殺されるだろう。そこでラハブは、自分が助かろうとして敵側に寝返ることを考える。ちょうど都合がよいことに、目の前にはイスラエルのスパイがいる。警察には嘘をき、二人をかくまい、そうやって恩を売る。その見返りとして助けてもらう。ラハブはしたたかな女性

だったに違いない。人間的な見方をすれば、こうなるでしょう。

(2) 神の前に立つ

でも、もしそうだとするなら、なぜラハブは12節でこんなことを言うのでしょうか。「どうか、私があなたがたに真実を尽くしたように、あなたがたもまた私の父の家に真実を尽くすと、今、主にかけて私に誓ってください。そして、私に確かな証拠を下さい。」

「主にかけて」と言っています。神の手につきがりついて救いを願っています。ただの損得勘定でイスラエルに寝返ることだけを考えているのなら、こんなことは言わないでしょう。ラハブはイスラエルの神は本当におられるのだと信じています。その神の前にラハブは立とうとしています。

疑り深い人は、それもラハブの演技だと言うのでしょうか。でも、ラハブのことばには偽りがなく、本心を語っていることは、それを聞いていたふたりのスパイでさえわかりました。それでこう言うのです。「あなたがたが、私たちのことをしゃべらなければ、私たちはいのちにかけて誓おう。主が私たちにこの地を与えてくださるとき、私たちはあなたに真実と誠実を尽くそう。」

2 「私たちは誓いから解かれる」

そんなやりとりがあつた後で、ふたりのスパイはラハブに言っています。17節。「あなたがたが私たちに誓わせたこの誓いから、私

たちは解かれる。」

おやっと思いませんか。どうしてこんな話になるのかと混乱してしまいます。最初に申し上げておきますが、これは決して「さっき誓ったことをなかつたことにする」と言っているわけではありません。では、どういう意味なのか。

17節から20節までのところに、ふたりがラハブに語ったことばがあります。注意して読むと、ひとつの特徴があることに気がつくでしょう。17節と20節に同じことばがあります。「あなたがたが私たちに誓わせたこの誓いから、私たちは解かれる。」19節の後半には短いけれどやはり同じことばがある。「私たちは誓いから解かれる。」

三度繰り返して念を押しています。三度も繰り返すのですから、かなり大切な内容ということになります。ラハブとその家族が救われるためには、必ず三つの条件をクリアする必要があります、と念を押しているのです。三つの条件を見ていきます。

一つ目の条件は、窓に赤いひもを結びつけておくこと。イスラエルがエリコの町を攻めるにあたり、イスラエルの軍隊に対してラハブの家のことが知らされるはずです。「あの家の中にいる者は敵ではない。同じ信仰者である。彼らを救わなければならない。」

そうは言っても問題が一つあります。ラハブの家がどこにあるのか、知っているのはこのふたりだけです。ほかの人は知りません。でも赤いひもが窓にくくりつけられているのなら、だれでもラハブの家をすぐに見つけ出すことは容易になります。それで一つ目の条件が赤いひもになります。

二つ目は、あなたの父と母、兄弟、また、父の家族を全部、家の中に集めておくこと。

イスラエルがエリコを攻めるとき、町は大混乱になることは当然予想されました。そのなかからラハブの家族を安全に救い出すためには、一箇所に集まってもらう必要があります。ラハブの家の中にいる者については責任を負うけれど、家の外にいる者については責任を負えない。そのように条件を加えます。

三つ目は、自分たちふたりのことを警察に通報しないこと。もし自分たちのことを警察に通報したなら、スパイは逮捕され処刑されます。イスラエルはエリコを攻めることができなくなります。救いもありません。

いやそれ以上に問題になることがあります。もしふたりのことを警察に通報したなら、ラハブは神に対して嘘をつくことになるのです。12節でラハブは言っていました。「私あなたがたに真実を尽くした。」この場合、真実を尽くすとはどういうことでしょうか。ラハブはどんなことがあってもふたりのことを口外しないということです。たとえ警察に脅迫されようとも、たとえ殺されることがあったとしても、絶対にふたりのことを教えないということです。ラハブに対し、そんな危険があるけれど、そのことで最悪の場合死ぬかもしれないけれども、あなたはその覚悟はあるのかと問いかけているのです。

この三つの条件のうちの一つでも破られたなら、ラハブもラハブの家族も救うことはできません。ふたりのスパイが三度も繰り返して「私たちは誓いから解かれる」と言っているのは、そういうことです。

もちろん責任逃れというのではありません。私たちは、ラハブを救えるかどうか自信がないとか、もし救えなかったとしても責任はない、と言っているのではない。その逆です。もしこの三つの条件さえきちんと守って

くれたなら、どんなことをしてでもあなた方を救う。もし万が一、救うことに失敗したならば、それは自分たちの責任であって、そのさばきを神から受けなければならぬとさえ言っているのです。

3 「おことばのとおりにいたしましょう」

(1) 死を覚悟する

これに対しラハブは21節でこう応答します。「おことばどおりにいたしましょう。」ふたりのスパイが提示した三つの条件を守ると約束します。短いことばですが、よく見ると、重いことばです。赤いひもをくりつけると、家族全員を集めることは比較的容易なことではあったかもしれませんが、けれども三つ目の条件は、違います。「おことばのとおりにいたしましょう。」ラハブは、自分が死ぬかもしれないけれども、それでもよいと言っているのです。

もし、ラハブが自分ひとり助かりたいと思っていたのなら、このような条件は受け入れられなかったでしょう。ラハブの願いは、自分が助かることよりも、自分の家族が救われることにあります。家族を救うために、自分が犠牲になることを覚悟します。「おことばのとおりにいたします」には、そのような意味が込められています。

(2) 真実を尽くす

ここまでラハブとふたりのスパイとの間に交わされた会話を見て参りました。いったい彼らは何を見ていたのだろうかと考えさせられます。契約書のようなものが両者の間で交わされたわけではありません。目に見える証拠は何もないのです。ラハブは12節で「私に確かな証拠を下さい」と言っているいま

すが、この世の常識から見ると、まったく当てにならない言わば詐欺のような話だと言われても反論できません。

ところが彼らはどうしたか。目に見える証拠はなにもないのに、自分の口で語ったことは、きちんと守らなければと考えています。なぜそうするのでしょう。神は真実と誠実を尽くす方であると信じているからとしか言いようがありません。目に見えない神の前に自分たちはいる。その方の目を絶対にごまかすことはできないと思っています。

ラハブは、この神の前で真実を尽くそうとします。いのちを捨てても守らなければならないと考えます。自分を救うのではなく、家族を救うためにそうしようとします。それが彼らの信仰でした。

(3) 主は渡された

このあと、ふたりはイスラエルの陣地に無事に戻り、ヨシュアにこう報告します。

このように断言するからには、それなりの理由があったはずで、エリコの住民がイスラエルのことを聞いて震え上がっているからでしょうか。それもあつたでしょう。しかしもっと大きな判断材料がありました。異邦人であるラハブとその家族をイスラエルの神が救おうとしている。その事実を目の当たりにしてきたのです。イスラエルの人々がエリコを攻める前に、もう神はエリコの人々中で働いておられ、道を開いておられる。救われる者が起こされている、その事実を見てふたりは驚きました。「主は、あの地をことごとく私たちの手に渡されました」と言ったのは、そのことがあつたからでした。

私たちも、いろいろな問題や試練を目の前にして、この先どうなるのかと不安になるこ

とがあります。そんなとき、マイナスのこと
や否定的なことばかりが頭に浮かんできて、
暗くなります。しかしラハブを見ていただき
たい。ラハブは何を見ていたでしょうか。何
をしなければならないとこだわったでしょ
うか。真実と誠実を尽くす神を見ようとしま
した。その方のために、いのちを投げ打つて
でも真実を尽くすべきだと考えました。それ
で本当に救われるのかは確信があったとは思
いません。確信がなくても、真実を尽くす
ことにこだわります。

私たちが見ることはその事のように思
います。無駄なことでしょうか。いいえ。神は
真実と誠実を尽くす方です。真実を尽くそう
として愚かに見える選択をしなければならない
ときがあるかもしれません。馬鹿にされ
たり、笑われたり、なかには叱られたり、そ
んなふうに言われることもあるでしょう。そ
んなことばを聞いてまた落ち込む込んでし
まいます。

でも私たちの前には神がおられるのです。
もし、私たちが真実を尽くすことに心を砕く
なら、かならず主は真実と誠実を持って報
いてくださる方なのだと、きょう聖書は語
って下さいます。